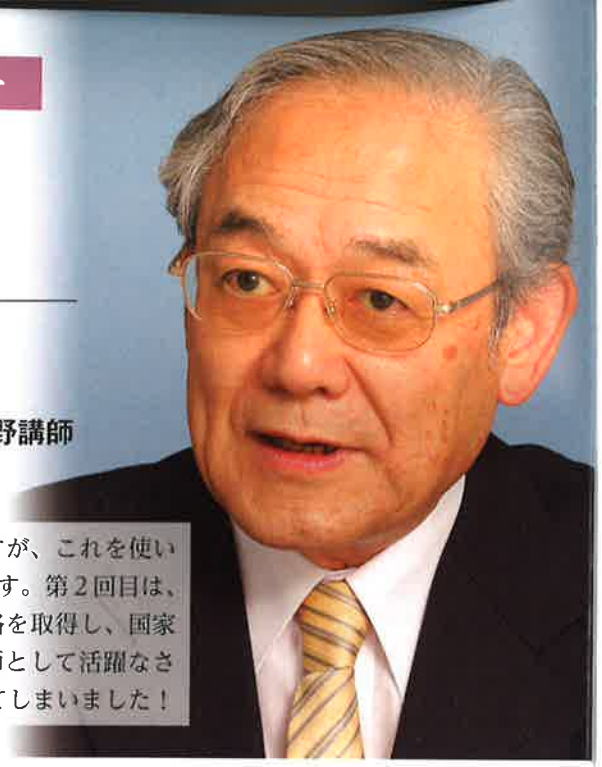
スペシャルインタビュー

英語達人に聞く！

Target #2

根岸 正

通訳案内士・観光通訳ガイド分野講師



英語の上達には日々の学習も大事ですが、これを使いこなす“達人”の話を聞くのも近道です。第２回目は、通訳案内士をはじめ７つの英語の資格を取得し、国家資格である通訳案内士試験講座の講師として活躍なさっている根岸正先生に、いろいろ聞いてしまいました！

子供時代と東京五輪と善意のガイド

子供のころから英語には興味がありました。アルファベットやJack and Bettyの教科書…そこに載っていた、テレビや冷蔵庫があるアメリカの家庭の挿絵には、驚きと憧れを抱きました。学校では歴史とか国語とか、もちろん英語も好きでした。当時英語の先生が米軍関連出身の人で、すごくキザな人でしたが当然英語は本格的だったので「あんな英語が話せたら…」と、初めて英語を話すことに憧れました。

その後、20歳の時に東京五輪がありまして、世の中は英会話ブーム。やはり英語が好きでしたので、年上のサラリーマンに交じって、英語学校で英会話の勉強をしました。ちょうどその年にJNTO（日本政府観光局）がGoodwill Guide（善意のガイド）の実施を始めましたから、すぐに登録してバッヂを貰いました。そのバッヂはまだ大事に手元に置いています。思えばそのころから観光ガイドになろうという気持ちは持っていたんですね。

当時の英語学習法

当時は「読む」「聞く」が英語学習の中心でした。「読む」は、書店や神田の古本屋で英語に関する本――日本語で書かれた文章の中に英単語や英語表現が掲載されている本や、海外生活を体験しているビジネスマンの話が載っている本など――を漁って、読んで、自習していました。それらの本から得た現地の雑多な知識は、海外駐在生活に大変役に立ちました。

「聞く」は、当時FEN（現AFN）という米軍ラジオ放送網がありまして、日曜日の夕方のEnjoy Japanという番組は私のレベルの英語力でも聞き取れて楽しかったです。日本を英語で語ることに興味を持ち始めたのはこの時と思います。また、わかりやすい英語で海外の童話を話す番組もあり、聞き取れたときはとても嬉しかったです。あとは、ソノシートやオープンリールに録音した英語の音声を聞き流し、耳慣らしに励みました。

「通じればいい」から資格取得へ

高校を卒業してからJTBに就職し、幸いなことに社内でチャンスを与えていただき、外人旅行・海外旅行の仕事を経て、11年間の海外生活（香港･豪州）も経験しました。その過程で、実践的な英語力は自然と身に着いたと思います。ただそういう流れでやってきましたので、長らく、「英語は通ずれば十分だ」と思っていました。

ですがある時、職場で知り合った英語の達人に刺激され、50を過ぎてから一念発起、英語の資格試験に挑戦することにしました。結果、7つの資格を取得しましたが、今回お話しする通訳案内士試験に合格したのは57歳の時です。

通訳案内士を経て教える側に…

今、私は数カ所で英語講師をやっています。ボランティアガイド・プロの観光通訳ガイドを目指す通訳案内士試験受験準備講座・試験合格者対象のガイド実務養成講座や、大学で、学内の留学生を英語で案内する準備のための講座などを担当しています。

通訳案内士講座には、試験に合格するための講座はもちろんですが、合格者を対象にしたガイド実地訓練「ガイド実務養成講座」というのもあります。通訳案内士の資格は自動車免許みたいなもので、仮に試験に合格しても、業務経験を重ねずしてガイド能力は身につきません。いきなり仕事に取り組むと、3~4日を予定していたツアーが、半日でキャンセルされた…などという事態が起こることがあります。勿論、試験には合格しているわけですから、語学力も知識もそれなりにありますが、ガイドの進め方の不手際やおもてなしの経験不足でお客さんから「×」がついてしまうのです。

研修中の模擬ガイドでは、実際に観光スポットに行って受講生仲間をお客様に見立てて、対象物の前で説明・案内するわけですが、合格者でも半数近くの人は、結構てこずる状態となります。

また、例えば、都内下町の芭蕉記念館に案内するというような場合、そもそもそういう所に関心を持ってツアーに参加する外国人旅行者は、日本に関心が高く良く知っています。ですから、「What is a difference between haiku and haikai?（俳句と俳諧の違いは?）」なんてひとひねりした質問が飛び出したりするわけです。そうなってくると、いくら英語が堪能でも、その背景知識がなければその先へは進めません。

Profile

神奈川県立鶴見高校卒業後、JTBに40年勤務。その後は、社団法人日本観光通訳協会事務局長在職7年、その間、地方自治体及び各種団体主催の通訳案内士・ボランテイアガイド研修（企画・運営・教材作成・講師）に携わる。又、英語パッケージツアーCSコーデイネーターで体得した観光通訳ガイドに関わるCSを下敷きに、各種カルチャーセンター開催の英語ボランティア・観光通訳ガイド及び大学で観光ガイド講座の講師を歴任。その講座は受講生から絶大な支持を得ている。通訳案内士（国家資格）、英検１級、ビジネス英検１級、旅行業英検Ａ級、観光英検１級、工業英検２級、TOEIC924点。

特に今は、TOEICテスト（公開テスト）840点以上を得た人は、英語筆記試験が免除されるのですが、それを使って合格された方の中には、日本文化等の知識の蓄えが少ないために、現場で、もっと関連する英単語・表現や知識を学ばねばと痛感することがあるようです。

必須・基本は「中学英語」

「そんな…日本に関する知識とそれを表すための英文の両方なんて覚えられない。自分には無理だ…」と感じる人もいるかもしれませんが、そんなことはありません。

合格するために基本的に必要なことは、中学英語（英文法）のマスターです。私は英語の資格を7つ持っていますが、どれも基本にしたのは中学英語です。あとは分野ごとに必要な単語を覚えれば十分です。

通訳案内士試験に合格するには、英語の他に、中学・高校で学んだ日本地理・日本歴史・一般常識を再度復習して、直近の訪日観光客の日本訪問の動機や関心事を抑えれば合格への手ごたえを感じるはずです。

つまり、言いたいことを整理し、それを中学レベルの短い簡単な（文法的に正しい）英文で表現できれば全く問題ありません。かっこいい英語じゃなくても、発音やイントネーションが少しおかしくても、きちんと伝わります。

さっき話に出た大学での講座では、もちろん受講者は大学生。彼らは当然受験のために英語を勉強し合格しているわけですから、英語力は十分備わっています。でも、なかなか喋るのは難しい。それは、日本語をそのまま英語にしようとするからです。

ですから私は「日本語をそのまま英語にしようとしないこと。言おうとする日本語を分かり易い文にリフレーズして。それが長い文だったら、2つ3つの短文に分けて、それを自分なりの英語で発信して下さい」と、よく言います。このような簡単なテクニックで、どんな内容でも、中学英語レベルで十分相手に伝えることが出来ます。

英語はhow wellではなくwhatが大事

さらに、「how well＝かっこよく上手に」ではなく、「what＝何を伝える」を重視してほしいのです。たとえば、外国人を神社に案内するとします。参拝方法、しめ縄、手水杓で手を洗う意味…などといった基本的な知識がなければ、その人がどんなに美しく英語の発音ができたとしても、絶対に、（日本語でさえも）案内はできません。

ですからまずはお客様に伝えたいことを見定めること。それらを整理して、関連する知識と単語を身につけること。そうすれば、複雑な英文の暗記などせずとも、中学英語を活用するだけで、自分なりの英語で伝えられます。私は常々、通訳者は、100の内容を過不足なく100通訳する、“言葉とことばの橋渡し役”＝受信型コミュニケーターで、一方、通訳案内士（観光通訳ガイド）は、100の内容を、そのことに関心があまりないA観光客には70、強く関心を示すB観光客には100以上と、TPOに応じて創意工夫・自由自在にガイディングをする“心とこころの橋渡し役”＝発信型コミュニケーター…と比較・対照し、通訳と通訳案内士の役割の違いを説明しています。

「日本に関する日本語で書かれた本を読むときも、気になった表現に線を引き、辞書を引きながら、その英語訳をどんどん書き込んでいきます。こうすることで、what＝「話したいこと」について、英語で効率よく知識を整理・蓄積できるのです」

目標と仲間を作ること

これまでの私の経験を振り返ってみるとやはり、語学を身に付けるのにはある程度時間が必要と思います。つまり地道な継続が必要ですが、そのためには漫然と取り組むのではなく、目標を設定するのが良いと思います。自分の関心のある分野の英語で書かれた本を読む/英語で放映されるテレビ番組を見るのも良いのですが、わかりやすいのはやはり、資格試験の合格です。目標がはっきりしているので的が絞れますし、そのため、効率的な学習ができますし学習の進捗度合いや達成感を得られます。

もう1つの学習のコツとしては、仲間を作ることをお勧めしたいです。私も英語討論会や文化交流の講座など、いくつかの英語関連の集いに参加してきました。同じ学習者仲間なら、皆それぞれ一長一短を持ち合わせていますが、お互いにそれらを学び合い補完・激励し合い、それによって相乗効果が生まれ、実力が伸びていくと思います。

通訳案内士試験・資格の現在

最後に、通訳案内士試験・資格のことについて少し。じつは、意外に思うかもしれませんが、最近はシニア世代の受験者・合格者がとても増えているのです。

企業戦士も55歳を越えたあたりから、そろそろ定年を意識し始めます。そんなとき、リタイア後は、仕事を通して身に付けた語学力や業務経験・知識を活かしながら社会貢献（ボランティアガイド）し、機会があればお小遣いの補強ために通訳案内士を目指す人が多いのです。そこで、まだ現役でも、定年後、充実した人生の準備のために試験を受けておこう…という人が増えているのです。日本の地理、歴史、一般常識などに関しても、蓄積があるぶん、若い人よりも強かったりしますからね。

ですが、いくら合格人数が増えても、シニア世代は10年後には、かなり高齢になり体力的に心配もあります。そこでもっと若い人が受験し易いように、検定試験やセンター試験の成績で一定条件を満たせば、試験の一部を免除するという制度が作られました。そのため若い合格者も最近は増加傾向にあります。

通訳案内士資格は、必ずしも観光通訳ガイド職に就かずとも、語学のプロとして様々な分野で役に立つはずです。

例えば、一般企業での海外駐在・出張中で日本事情を説明する際、日常会話の授業から脱却して発信型コミュニケーターの育成を目指す各種専門学校・小・中・高・大学の語学講師等で活躍する際、東京オリンピック開催に向けて増え続ける訪日観光客をおもてなしするあらゆるホスピタリティー分野でも、この資格は強みとなります。是非、英語学習の目標として、この資格に取り組んでみてください。気づかなかった日本伝統文化の良さを再認識し、様々な知識を学ぶ大変良い機会になります。そして、語学の勉強を通して、様々な分野・幅広い年齢層の人とのつながりを深め、これからの仕事や生活を楽しみましょう！